



©日本ユニセフ協会/2010/Kaneko

PROFILE

1955年香港出身。72年「ひなげしの花」で歌手デビュー。一躍、日本で国民的スターになる。芸能活動のほか、大学教授、本の執筆なども行う。98年より日本ユニセフ協会大使。教育学博士。著書に「小さな命からの伝言」(新日本出版社)ほか。

25年前、エチオピアの難民キャンプを取材して人生が変わりました。毎日食べるものがなくやせ細り、次々と死んでいく子どもたちの姿。それまでまったく知らない世界でした。地球上にこんなにも苦しんでいる仲間がいるのに、何もしてこなかった自分が恥ずかしかった。自分の無知が許せませんでした。それ以来、世界の人々のためにできることはないかと、ボランティア活動を行っています。

今年2月には、アフリカ東北端にあるソマリアを訪問しました。「世界から忘れられた国」。内戦が20年以上続くこの国は、無政府状態となっています。今回の訪問も自爆テロや誘拐未遂などで何度も延期になり、やっと実現したものでした。

私が行ったのは、ソマリア第二の都市、ハルゲイサにある避難民キャンプです。辺り一面に見えるのは、空き缶

と段ボールのつぎはぎで作られた壁と古着をかぶせて作った屋根。配給や医療のサービスもなく、まったく放っておかれた状態でした。

ある妊婦の女性は、9人の子どもとお腹の子を連れて、南部の戦禍を逃れてきたそうです。とはいえ、このキャンプにいても、食べ物はなく、子どもを学校に行かせることもできない。毎日が惨めだと嘆いていました。でもその後、彼女は顔を上げてはっきりとこう言ったんです。

「でも私は成功者よ」

えっ?と聞き返すと、「だって私、生きているじゃない」って。そう、この国では、生きていること自体が奇跡というくらい、人々は過酷な状況にあるのです。

またソマリアには、FGM(女性器切除)という深刻な問題があります。10代前半に性器を切除するこの儀式を、女性の97%が経験しているのです。イ

スラム教の教えとされていますが、コーランにはそんなこと書かれていない。でも正しい知識がないので、女性の身体を傷つける風習がずっと続いているんです。村の切術師の女性は「FGMは禁止されているけど、私にも生活があるからやめられない」と。まずは宗教指導者たちに正しい知識を伝え、「FGMは必要ない」と理解してもらわなければならない。まだまだ道のりは長いと感じました。

私がこの国で目にした現実、これまでになく過酷なものでした。でも、ソマリアの人は生きる希望を捨てていません。私たちは、彼らがそこに「生きている」ことを忘れてはいけないし、平和や安定を待つのではなく、今できることから支援しなければなりません。それがいつの日か、希望の種となり、小さな平和の芽が出てくるのではないかと信じています。